

前田 信明 Maeda Nobuaki

前田信明の絵画—大地-垂直と水平

菅 章 (Suga Akira)

前田信明は九州の地方都市「熊本」を拠点として、物質や色彩などの本質的要素へと還元するミニマリストティックな絵画の制作を続けてきた。それは理知的・究明的な絵画がなじみにくく、「造形的なだし」として使われてきた我が国の芸術風土において極めて稀な制作姿勢であり、40年以上それを継続してきたという事実、とてつもないエネルギーと信念を感じずにいられない。だが、もしかしたら前田にとってそのことは、信念というより、制作の起点において絵画の目指すべき地平がしっかりと捉えられていたから、といった方が正確かも知れない。

何よりも前田の絵画には銜(てら)いが無い。前田は巷で見かける多くの抽象絵画が、ステレオタイプ化した造形言語のシンタックスを多用し、これ見よがしに絵作りの極意を画面上で見せつける姿に辟易せずにおられない。もちろん制作として経験則がものをいうわけだが、どこに向けられているかは、より本質的なことであり、そこがぶれるといかなる技巧や熟練も装飾的、工芸的にならざるをえない。いっさいの装飾性、文学性、再現性を排し、純粋に絵画と向き合う前田の誠実な「視線＝精神」こそ、制作の起点となり、その作品の存在(レゾン)証明(デートル)となっている。

例えば、2013年のキッド・アイラック・アートホールでの個展に出品した大作では、無彩色に近い黒色やアンバー系などの抑制された色彩が滲んだ縦長のローカンヴァスに種類の異なる2本の線が垂直に貫かれている。形状や要素、材質などから一見バーネット・ニューマンやモーリス・ルイスとの親近性を感じさせるこの作品は、大地をテーマとしたシリーズだが、その制作過程を知ると過激さゆえ少なからず驚かされることだろう。

まずアクリル絵の具等で着色したローカンヴァスを大地に戻すかのように風雨に晒し、風化や劣化、汚損をあえて施すことで、黒土や褐色系の泥のような鈍い色彩が充填される。そこにサンダーと水で研磨・洗浄し、陽に干して乾燥させることによって、カンヴァスはダメージをうけながらも複雑なグレーの諧調を伴った布へと変化し、さらに熟成していく。最後は水で洗い流して、(時に加筆しながら)仕上げるのだが、この荒々しい手業は絵画というより、現代彫刻やプロセスアートの作家のドラスティックな制作現場に近いかもしれない。これら一連の行為を通じて、カンヴァスは単なる描かれる前提であったり、形象的イメージであったりすることを超え、作家の身体と同期し血肉化した事物へと転化する。その事物化の過程において前田は世界に身を置きながら、内触覚的(パプティック)な絵画へと審級させるのである。前田は制作を通して、彼の絵画が目指す地平、すなわち人間の存在と世界との関係を可視化するのである。

前田の絵画には2013年ころから純度の高い色彩が登場する。また矩形の画面に垂直線だけでなく、水平のラインが画面中央でクロスするようになる。画面はほぼ正方形に近い1.085:1という比率で、わずかに縦長である。前田はこの比率を経験則によって自ら見出したそうだが、この「聖なる数字」ともいえる矩形は色彩と空間が一体化する心地よい比率だという。当然フレームは手作りで、カンヴァスも目止めしていない麻布。中央に走る垂直、水平が十字状の線は引いた線と残すことで出来た線である。このいささか象徴的に感じられる十字は、単なる形象でもなければ、何かのシンボルでもない。ほぼ単色に塗り込められた画面は不思議なゆらぎと輝きに満ちている。そのゆらぎの正体が画面を分割している垂直と水平のラインに起因することは明らかだ。前田はいう。「僕の垂線、水平線は私たちの存在を表す、重力の垂直性。大地を意味し、世界が続いていく感覚を導く水平性なのです」(本人による制作ノート)。

我々は垂直の柱や壁、水平な床やテーブルがある世界に暮らし、それらをよりどころに生きている。その紛れもない身体性をともなった重力感覚と水平志向は、絵画の初源的要素である矩形のフレームとしてすでに構造化されている。もちろんそれは前提であり、その物理的なフレームの中で織りなす絵画行為は、フッサールがいう「生活世界（自然な日常的経験において生きられる世界）」に他ならない。しかし誰もが知覚していながら、もっとも本質的な絵画のア・プリオリな要素である垂直、水平を空気のような存在として無自覚にやり過ぎている。前田の絵画はその本丸を周到な手続きによる精緻な絵画行為で顕現化するのである。アクリル絵の具（あるいは樹脂で顔料を練ったもの）を薄く溶き、意識して刷毛で線を残しながら30回から50回ほど塗られたというその表面は、水分を含ませた画面上でコントロールされたステイニング（染めこみ）技法によって充たされていく。その画面は、色を載せるのではなく、色がそこにあるがごとく塗ることによって、カンヴァス、水、絵の具が一体となる。絵の具の存在感よりも発光体のように内側からの煌めきによって透過した表面は、深く美しい色彩へと桁上げされるのである。ラインは不可避的に余白の部分として浮上するが、残されたライン（水平）と引かれた、あるいはスクラッチされたライン（垂直）という異なった要素が絵画空間に織り込まれていく。さらには線の生成のための巧緻な仕事によって、我々の視知覚はこの名状し難いゆらぎの感覚を覚える。しかしそれは決してイリュージョンの効果などではなく、崇高な色彩と秩序ある画面が自立的な存在となったことを知らせしめるモメントなのである。

前田は2016年4月14日と16日の熊本地震で被災した。2度にわたり震度7を記録した未曾有の激震—とりわけ16日の本震では、迫りくる死の予感の中、幸運にも自己の生を確認するが、大地が波打ち揺れ動く自然の驚異に美術が全くの無力であることを痛感し、絶望と虚脱感に襲われたという。最も信頼のおけるはずの＜グラウンド＝大地＞が揺れることは、我々のよって立つ場を喪失することに他ならない。作品のそれは彼の作品のタイトルにしばしば使用されてきた、「大地」というキーワードが文字通り揺らぎ、生きる上でのすべての基盤が不確かなものとなった瞬間でもあった。そのことを象徴するかのように、アトリエにある旧作と制作中の多くの作品が損壊するという不幸にも見舞われた。被害の甚大さに加え、その後も終息しない余震は、人々の精神をも蝕んでいく。繰り返す余震、建物倒壊の危機の中、車中で宿泊せざるを得ない身体的・精神的極限状況の日々は、垂直に立つという、当たり前な日常的行為を根こそぎ否定する。破壊は単なる物理的なそれだけでなく、同時に前田の精神的バックボーンがゆらぎ、制作の危機が訪れたことを示すメタファでもあった。さらに予定していた韓国大邸のGallery SHILLAでの個展の延期、中止さえも考えざるを得ない状況であったに違いない。

だが、安否確認のために交わしていた前田とのメールで、4月19日には不安な精神状態の中、早くも美術家として地震に立ち向かう決意を表明している。

「（前略）強い余震が、まだあります。熊本は大きな被害です。僕の作品も、何点か損害を受けました。しかし、制作に励みます。僕は美術家です。このような時であるからこそ、希望をもって前進します。それをしなければならぬと思います。」（筆者へのメール）

この地震によって前田の「絵画＝大地」は、いったんリセットされた観がある。しかし、見方を変えれば、今こそ前田が絵画の中で措定し、志向した大地と人間の関係性について問うときではないだろうか。作品と絵画に向けた純粋な営為が、地震で一瞬にして瓦解したことによって、重力の意味や垂直、水平という恒常性に対する根源的な問が始まるのである。またそれは個人の問題と併せて、社会的存在であることから逃れられない美術家の責務でもある。そう、前田のこれまで追求してきた絵画の真価はこの地震の後だからこそ問われるのだ。それは地震に対して無力である美術が人間精神の根幹の部分を担当しているからというパラドックでもある。

1755年のリスボン地震は18世紀以後のヨーロッパの精神風土にただならぬ影を落とした。ヴォルテール、ルソー、カントといった当時の思想家や哲学者がこのことについて言及し、その影響はその後の自然観、科学観、哲学観の変更を生じさせるまでに至った。特にカントが自らの哲学の中で非常に重要な概念として発展させた「崇高」は、20世紀に入り、ニューマンをはじめとするアメリカの抽象画家たちの大きな指標となっていった。前田もまた、崇高という概念に絵画の本質を参照させてきた美術家の一人であろう。モダニズムの絵画の自己批判性を継承しつつ

、「美しい」造形性と「崇高な」精神性との葛藤の中で、自己に付着したあらゆる芸術形式を払拭しながら、新たな構想(コンセプション)を絵画に吹き込んできたのである。

芸術未来都市一大邸のGallery SHILLAでの個展に向け、前田のボルテージはこれまでになく高まっている。スケール感のあるホワイトキューブの画廊空間は、前田の深く美しい色彩と魅惑的なマテリアルを持った作品を際立たせるに違いない。近年の新作にはさまざまな色彩が登場しているが、特に、コバルトブルーやセルリアンブルーを多く使用しているという。地震体験以後、これらの顔料は前田にとって未来へ向かっていく意思をあらわす色となった。この古典的な自然顔料は発色がよく堅牢で耐久性に富んでいるだけでなく、その粒子が光を呼び込み、深い空間と発光するような輝きをもたらすのだ。もちろん、そのピグメントに依存するのではなく、基底材・顔料・水・画家の行為によって、時間性をも包含することで、画面は「崇高」な空間として立ち上がってくる。

欧米のスタンダードや特定のアートシーンに組することなく、熊本という地方都市で40年もの間、絵画の目指すべき地平を眺め続けた前田信明一。今回の個展は、全くしがらみのない大邸というニュートラルな場所で、彼の未来に向けた想像力と冒険心が十全に発揮される契機でもある。地震という苦難を乗り越えて、さらに明快な構想力(コンセプション)を獲得した、前田の新たな「大地＝絵画」を体感することができるだろう。